

令和6年度と令和7年度の推計結果にずれを生じさせる要因は、主に実績値が変化したことによるものが大きいです。市全体または各小学校区における推計結果の違いを示し、その考えられる要因をA～E条件(後述)いずれによるものかを分析しました。

市全体	■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1	
	児童数合計 《減》 4,131→4,082	学級数合計 《増》 181→183

■ R6年度版とR7年度版の比較表

対象年度	R6年度版		R7年度版		比較 同対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
	実績値	児童数計 (a)	実績値	児童数計 (b)	
R6	実績値	4,131	実績値	4,131	
R7	推計値	4,055	実績値	4,082	1.007
R11	〃	3,782	推計値	3,652	0.966
R16	〃	3,142	〃	3,056	0.973
R26	〃	2,914	〃	2,830	0.971

推計年度から当面は、R6年度版よりR7年度版が“小”(cが1未満)の傾向が強まる。
 …理由 各小学校区の結果の積み重ねのため、後述の小学校区ごとの結果を参照

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1 (一覧)

小学校区	児童数合計 《減》	学級数合計 《増》
黒内小学校区	1,268→1,248	48→49
大井沢小学校区	404→398	18→20
大野小学校区	141→151	8→8
高野小学校区	188→178	9→9
守谷小学校区	727→675	28→26
御所ヶ丘小学校区	280→303	15→16
郷州小学校区	278→327	15→16
松前台小学校区	278→266	16→16
松ヶ丘小学校区	567→536	24→23

黒内小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《減》	学級数合計 《増》
1,268→1,248	48→49

■ R6年度版とR7年度版の比較表

対象年度	R6年度版 児童数計 (a)	R7年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 1,268	実績値 1,268	-
R7	推計値 1,386	実績値 1,248	0.900
R11	// 1,477	推計値 1,227	0.831
R16	// 1,032	// 921	0.892
R26	// 925	// 862	0.932

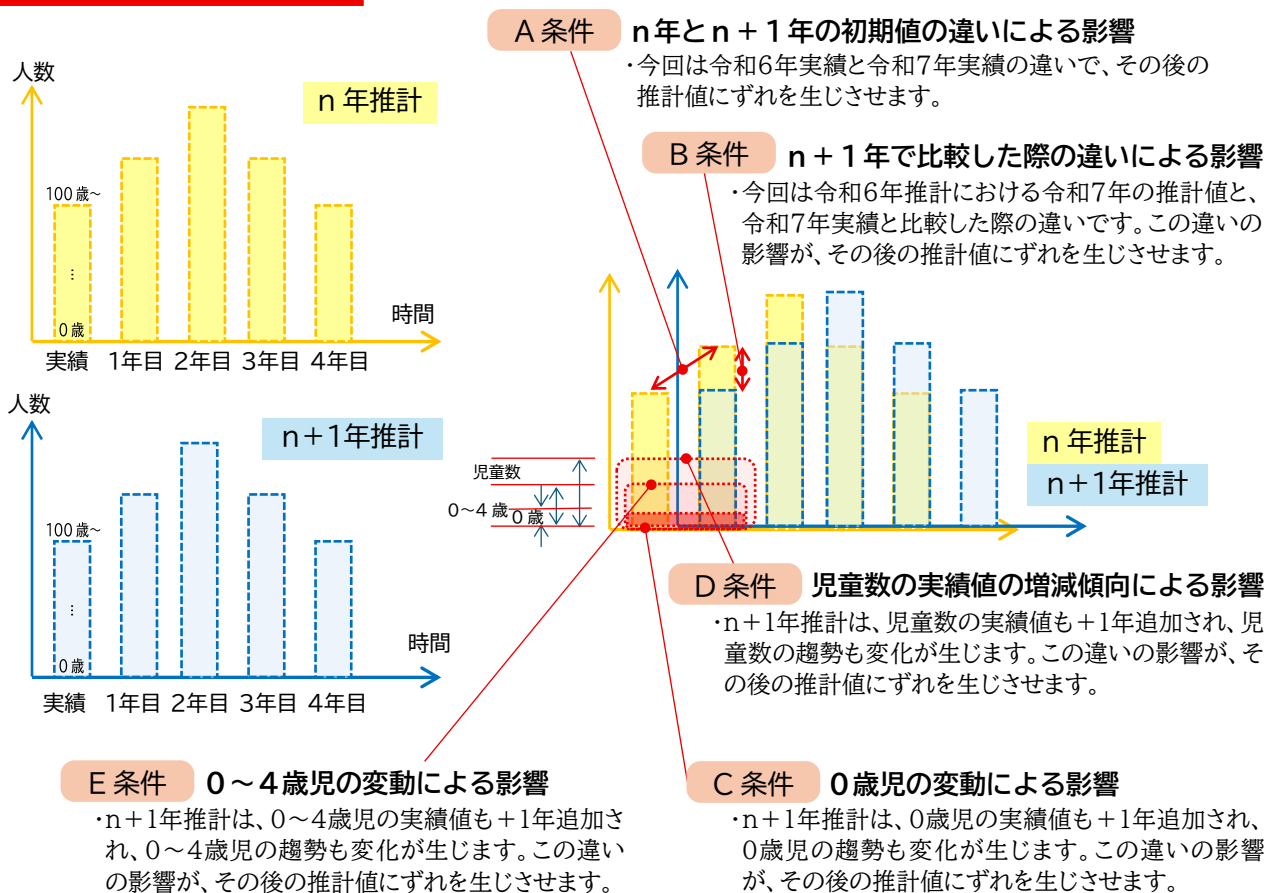
推計年度から当面は、R6年度版よりR7年度版が“小”(cが1未満)の傾向が強まることとなった。
 …理由 A条件がマイナス、B条件がマイナス、D条件

推計年度中～後半は、R6年度とR7年度推計の差が1に近づく傾向にある
 …理由 C条件、E条件

■ 要因分析表

条件	説明	計算式	結果
A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6実績) / R7 (R7実績)	1,248/1,268=0.984
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7年度のc	0.900
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	微増傾向(R5:5人、R6:6人 R7:8人)
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	R6までは対前年比は1を超えていたが、全体的に1に近づき、R7では対前年比は1を下回った(1.140→0.984)
E条件	0～4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	増減率は1を下回っているが、全体的に1に近づく傾向

各理由(A～E条件)の解説



大井沢小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《減》	学級数合計 《増》
404→398	18→20

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 404	実績値 404	-
R7	推計値 397	実績値 398	1.003
R11	// 324	推計値 328	1.012
R16	// 276	// 274	0.993
R26	// 270	// 259	0.959

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がマイナス、B条件がプラス

R16 年以降が R6 推計より“小”(cが1未満)の傾向になる。

…理由 E条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) / R7 (R7 実績)	398/404=0.985
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.003
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	変化なし
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	変化なし(増減を繰り返す)
E条件	0~4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	R6-R7で減少

大野小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《増》	学級数合計
141→151	8→8

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 141	実績値 141	-
R7	推計値 131	実績値 151	1.153
R11	// 111	推計値 132	1.189
R16	// 76	// 99	1.303
R26	// 66	// 85	1.288

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がプラス、B条件がプラス

R26 の推計値は“大”(cが1以上)の傾向が弱まる。

…理由 E条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) / R7 (R7 実績)	151/141=1.071
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.153
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	ほぼ変化なし
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	変化なし(増減を繰り返す)
E条件	0~4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	マイナス傾向が鈍化

高野小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《減》	学級数合計
188→178	9→9

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 188	実績値 188	-
R7	推計値 171	実績値 178	1.041
R11	// 150	推計値 150	1.000
R16	// 143	// 129	0.902
R26	// 142	// 94	0.662

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がマイナス、B条件がプラス

推計年度が進むにつれ推計値は“小”(cが1未満)の傾向が強まる。

…理由 C条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) /R7 (R7 実績)	178/188=0.947
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.041
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	R6は4人/R7は0と大きく減少
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	増減の繰り返し(大きな変動はなし)
E条件	0~4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	R4-R5,R5-R6までは微減、R6-R7で微増

守谷小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《減》	学級数合計 《減》
727→675	28→26

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 727	実績値 727	-
R7	推計値 639	実績値 675	1.056
R11	// 473	推計値 517	1.093
R16	// 485	// 530	1.093
R26	// 519	// 598	1.152

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がマイナス、B条件がプラス

推計年度が進むにつれ推計値は“大”(cが1以上)の傾向が強まる。

…理由 D条件、E条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) /R7 (R7 実績)	675/727=0.928
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.056
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	増減の繰り返し(R5:9人、R6:4人、R7:8人)
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	増減の繰り返しつつも減少率は緩やかになっている。
E条件	0~4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	R4-R5,R5-R6までは減少傾向が縮小し、R6-R7で増加に転じる

御所ヶ丘小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《増》	学級数合計 《増》
280→303	15→16

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 280	実績値 280	-
R7	推計値 266	実績値 303	1.139
R11	〃 243	推計値 256	1.053
R16	〃 207	〃 207	1.000
R26	〃 179	〃 171	0.955

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がプラス、B条件がプラス、D条件

推計年度中～後半は、R6 年度より R7 年度推計が“小”(cが1未満)の傾向になる。
…理由 C条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) /R7 (R7 実績)	303/280=1.082
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.139
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	減少傾向(R5:2人、R6:2人 R7:1人)
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	増減を繰り返しつつも、対前年比は徐々に1に近づく方向へ(0.950→1.139)
E条件	0～4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	増減を繰り返しており一定の傾向はみられない。

郷州小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《増》	学級数合計 《増》
278→327	15→16

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 278	実績値 278	-
R7	推計値 284	実績値 327	1.151
R11	〃 331	推計値 366	1.106
R16	〃 349	〃 317	0.908
R26	〃 255	〃 220	0.863

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がプラス、B条件がプラス、D条件

推計年度中～後半は、R6 年度より R7 年度推計が“小”(cが1未満)の傾向になる。
…理由 C条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) /R7 (R7 実績)	327/278=1.176
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.151
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	減少傾向(R5:5人、R6:5人 R7:4人)
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	増減を繰り返しつつも、対前年比は徐々に1に近づく方向へ(0.962→1.176)
E条件	0～4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	増減を繰り返しており一定の傾向はみられない。

松前台小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《減》	学級数合計
278→266	16→16

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 278	実績値 278	-
R7	推計値 251	実績値 266	1.060
R11	推計値 232	推計値 245	1.056
R16	推計値 189	推計値 213	1.127
R26	推計値 145	推計値 150	1.034

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がマイナス、B条件がプラス

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 D条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) / R7 (R7 実績)	266/278=0.957
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.060
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	微増傾向(R5:0人、R6:2人 R7:3人)
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	増減を繰り返しつつも、対前年比は徐々に1に近づく方向へ(0.961→0.957)
E条件	0～4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	増減を繰り返し

松ヶ丘小学校区

■ 基準となる実績人口の更新 R6.5.1→R7.5.1

児童数合計 《減》	学級数合計 《減》
567→536	24→23

■ R6 年度版と R7 年度版の比較表

対象年度	R6 年度版 児童数計 (a)	R7 年度版 児童数計 (b)	比較 同じ対象年度の 推計値の変化状況 (c)=(a)/(b)
R6	実績値 567	実績値 567	-
R7	推計値 530	実績値 536	1.011
R11	推計値 441	推計値 431	0.977
R16	推計値 385	推計値 366	0.951
R26	推計値 413	推計値 391	0.947

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“大”(cが1以上)の傾向になる。
…理由 A条件がマイナス、B条件がプラス

推計年度から当面は R6 年度より R7 年度推計が“小”(cが1未満)の傾向になる。
…理由 D条件

推計年度中～後半は、R6 年度より R7 年度推計が“小”(cが1未満)の傾向になる。
…理由 C条件

■ 要因分析表

A条件	n年とn+1年の初期値の違いによる影響	R6 (R6 実績) / R7 (R7 実績)	536/567=0.945
B条件	n+1年で比較した際の違いによる影響	R7 年度の c	1.011
C条件	0歳児の変動による影響	0歳児人口の変化	減少傾向(R5:6人、R6:3人 R7:2人)
D条件	児童数の実績値の増減傾向による影響	児童数の実績値の増減傾向(対前年)	増減を繰り返しつつも、対前年比は徐々に1から下に離れていく方向へ(0.993→0.945)
E条件	0～4歳児の変動による影響	0-4歳児人口の変化	増減を繰り返し

なお、大字別に1歳階級別の将来推計は、一般に大きな誤差を生じやすい種類のものであることから、毎年、前年度の将来推計値と実績値を比較して、将来推計にあたっての各種の係数等の算定方法の精度を高めているところです。



POINT 細かくすれば精度があがる？ 将来推計人口と誤差の関係について

将来推計人口については、昨今、推計誤差に関する研究も進みつつあります。それらの研究も含めて、共通的な認識として、「①将来推計人口の対象が小さくなると誤差が生じやすくなる」こと「②計算過程で様々な仮定要素を入れていくほど誤差が生じやすくなる」ことが言われています。

推計の詳細化と誤差との関係	特 徴
①将来推計人口の対象が小さくなると誤差が生じやすくなる。	<ul style="list-style-type: none"> ・小地域になればなるほど、人口動態（出生、死亡、移動）が確率的・ランダムになりやすく、誤差が大きくなる（＝安定しなくなる）という構造的な課題があります。 ・地域の細分化（高詳細化）と推計の安定性（低誤差）の間にトレードオフ（二律背反）関係が存在します。
②計算過程で様々な仮定要素を入れていくほど誤差が生じやすくなる。	<ul style="list-style-type: none"> ・①の誤差を補う為に、住宅需要予測など地域ごとの特性を勘案した要素を計算過程に含む工夫をしていますが、一方で、多くの仮定要素を含むことで、推計期間の経過とともに誤差が雪だるま式に増大（伝播）していく特性を持っています。